初稿

東京の模様師

着物を美しく彩る友禅染め。その作家は、自らを「模様師」と名乗る。東京の模様師たちはそれぞれに技術を磨きながら、最大の消費地である首都における和装産業を支えてきた。その歴史は、江戸時代まで遡る。

文・写真：樋口トモユキ

1980（昭和55）年、「東京手描友禅」が国の伝統的工芸品に指定された。昔ながらの手仕事を受け継いできた伝統的工芸品。その生産現場への支援策を盛り込んだ「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」が74年に施行され、翌75年には加賀友禅、76年に京友禅が相次いで指定を獲得した。少し間を置いた東京の指定により、着物の三大産地における友禅染めが出そろった。

友禅染めのルーツは、江戸時代の貞享・元禄年間（1684～1704年）を中心に京都で活躍した絵師、宮崎友禅斎とするのが定説となっている。ポイントとなったのは、糊を使った防染技法。それまでは刺繍や絞り染めが中心だった着物の柄に、鮮やかな色合いで自由度の高いデザインを施すことが可能となり、人々の心をつかんでいった。

その技法やデザインは京都から加賀、江戸に伝わり、それぞれの土地柄に合わせて様式を発展させてきた。金彩や刺繍を併用し、華やかで雅な京都。藍色や黄土色など、自然な風合いに重きを置いた色彩が特徴の加賀。一方、江戸の流れを受け継ぐ東京では、町人文化の発展を背景に、落ち着いた色彩の中に粋や洒落を盛り込んだ意匠が好まれた。

清流を求めて西方へ

東京手描友禅の伝統的工芸品指定の獲得に尽力したのが、模様師と呼ぶ友禅作家を中心に構成する、「東京都工芸染色協同組合」だ。代々模様師の家系の8代目、故・伊東薫氏はその組合の機関誌『染芸VOL・8』（1983年）で、自らのルーツを調査した成果を寄稿している。

その記事によれば、初代の伊東伊兵衛は京都から江戸神田村の豪族に養子に出され、名筆の人・模様師の江戸における元祖と評された。5代目に当たる平五郎は、幕末から明治初期にかけて多数の弟子を養成。それ以前には江戸の模様師は、神田の伊東、日本橋の小泉に加え浅草の某の3軒だけだったと伝える。

江戸時代には染色の工房は、城下町の町人地であり消費地にも近い神田や日本橋エリアに集中していた。現代でも、神田紺屋町といった地名に名残を留める。ところが明治に入って都市化が進行するにつれ、余分な染料や糊を洗い流す「水元」の工程に欠かせない川の水が、生活排水や工場から垂れ流される廃水で汚染されるようになった。工房はよりきれいな水質を求めて、神田川の上流に遡っていった。

1917（大正6）年に、三越呉服店が神田川にかかる戸塚町（現在の高田馬場）の田島橋のたもとに、着物を制作する直営の染工部（後に三越染工場）を開設したことも、一つのきっかけとなっただろう。この工場には立ち上げ時、およそ50人の職人が在籍し、そのうち20人は京都から呼び寄せた熟練技術者だった。

新宿区中落合の東京都工芸染色協同組合事務所で、70～80代の会員を集めて実施した聞き取り調査の様子。写真手前から飯島武文氏、森川明洋氏、江上昌幸氏、森川氏の息子の雄大氏、熊澤吉治氏、小倉貞右氏

工房移転の動きにさらに追い討ちをかけたのは、23年の関東大震災だ。甚大な被害を受けた下町を離れ、何軒もの染色関連業が神田川や妙正寺川沿いに工房を構え始めた。引き染めや湯のしなど、各工程の分業で成り立つ着物制作においては同じ区域に集まることにもメリットがあり、次第に集積が進むことになる。

坂井教人氏。1933年石川県に生まれ15歳で上京、美研荘で中井英三・川崎一與四に師事する。88年から鎌倉に工房を構える

戦後復興からの好景気に沸く

時代は昭和に入り、世間は暗いムードに包まれていった。第2次世界大戦が開戦した翌年の1940（昭和15）年には、不要不急の品物の製造や販売を制限する「奢侈（しゃし）品等製造販売制限規則」が施行された。一般には施行日にちなんで「七・七禁止令」として知られるこの省令は、着物の制作にも大きな影響を与えた。「振袖や高価で派手な着物、金銀糸の入った反物、菊の模様で皇室の御紋章に少しでも似ている物は全て使用できず、非常に困った」と、故・田中昌三氏は『染芸VOL・6』（1982年）に寄せた文章で振り返っている。ある者は転業、また招集・徴用されて戦地に赴く者もいた。

そして迎えた1945（昭和20）年の終戦。戦地や疎開先から戻った模様師たちは、戦後の物資不足の中で苦労しながら、それぞれに仕事を再開した。戦後復興と朝鮮特需により高度経済成長期の幕が開ける昭和30年代には、着物の需要も旺盛となる。模様師の間にも、宣伝のために連帯して作品図録をつくるなどの動きが見られ、後の協同組合設立の布石となった。

伝統を受け継ぐ協同組合

東京都工芸染色協同組合の直接の母体とされる団体は2つある。1つは田内康近や奈良東明子が中心となって52年に立ち上げた研究グループ「麓土社（ろくどしゃ）」。後に田内は協同組合の3代目理事長となり、奈良も理事を務めている。

もう1つの団体は、高田馬場や落合地域の工房を中心とした「草人舎」だ。中落合にあった染色工房、美研荘出身の坂井教人氏によると、草人舎の結成には旧・戸塚町にあった染色材料店「東屋（あずま）」が一役買っているという。同氏は「東屋さんが『東草』という、近辺の模様師さんに雛形を描かせて掲載する図録を年1回出していた」と証言する。ここに掲載された模様師が集まって、草人舎を名乗るようになったと推測される。

さらにこの草人舎が発展し、模様師だけでなく、引き染めや糊画の工房も巻き込んで企画したコンクール「三芸展」を始めたのが1957（昭和32）年。三芸展の第1回図録の表紙は、坂井氏が手がけたという。

そして62年、2つの団体が合流して東京都工芸染色協同組合の誕生に至る。初代理事長は三芸展の取りまとめを担っていた小倉玉鳳（博）が務めた。創設当時の組合員数は151名。80年代には伝統的工芸品の指定獲得も弾みとなり、組合員は300名を超えた。三芸展は「染芸展」に名を変えて、今に至るまで毎年欠かさず開催を続けている。

染

【参考文献・調査】

『**中村勝馬と東京友禅の系譜**』（外舘和子／染織と生活社／2007）

「**東京手描友禅について**」（伊東薫『染芸 VOL.8』pp.5-8／東京都工芸染色協同組合／1983）

「**東京手描友禅伝統工芸士第一回認定**」（田中昌三『染芸 VOL.6』pp.1-2／東京都工芸染色協同組合／1982）

「**座談会　東京友禅の今昔**」（『染芸 S.55 第2号』pp.6-13／東京都工芸染色協同組合／1980）

「**江戸川流域における染色業の形成過程**」（星野静衛『経済地理学年報 第16巻 第2号』pp.24-43／経済地理学会／1970）

『**三藝展 巻五**』（主催：東京都洗染商工業協同組合、製作編集：三芸会／1961）

『**麓土社 二**』（麓土社同人／1955）

飯島武文、江上昌幸、小倉貞右、熊澤吉治、森川明洋各氏からの聞き取り（2023年12月20日実施）

坂井教人氏からの聞き取り（2024年3月6日実施）